



むらぐも
紫雲



しやうこうしほ
燭光錦

すずき なおみち
鈴木 直道さん(40歳) 愛西市早尾町

文化を守り、期待に応え続けていきたい

今年で就農18年目を迎える鈴木直道さんは愛西市にある3haのほ場で花菖蒲、花ハス、カラーの3品目を中心に、季節に合わせて様々な花を栽培しています。端午の節句に飾りとして用いられる花菖蒲は5月初旬が需要の最盛期で、鈴木さんのほ場では定番品種である紫雲むらぐもに加えて燭光錦しやうこうしほ、日の出鶴などの希少性が高い4品種を栽培しています。

早尾花卉組合の花菖蒲のシェアは全国の7〜8割を占めており、4月になると全国から注文が届きます。花菖蒲の栽培について鈴木さんは産地としての責任を強く感じながら、これまで栽培を続けてきました。「花は時代の流れに需要が左右されやすい作物ですが、花菖蒲に限れば日本の伝統行事に欠かせないものとして今でも多くの人に愛されています。市場や花屋さんの期待に応え、日本の伝統・文化を絶やすことのないよう、これからも花菖蒲を育てていきます」とメッセージをいただきました。

木曾川に隣接するこの地域では、豊かな伏流水に恵まれた特性を活かして60年以上前から花菖蒲が栽培されてきましたが、この10年は疫病による被害が発生し、産地として厳しい状況が続いています。疫病は全国で発生しており原因は明らかになっていません。特に花菖蒲は最需要期である4月末から5月頭までが出荷時期になります。収量が安定しないため生産者の減少が続いています。こういった状況の中で、鈴木さんの所属している早尾花卉組合では特産品である花菖蒲を守るために、JAや県の普及課職員と協力しながらよりよい生育環境を整

えることはもちろん、抜本的な解決に向けた調査が続いています。現在は温暖期に与える水が疫病の経路として有力視されており、気温が上がる3月の灌水を控えることで疫病の発生を抑制することが期待できます。しかし花菖蒲の生育には十分な水が必要になることから、リスクを抑えながら収量を最大化する栽培方法の確立が現在の課題です。